

野球における左投手の優位性に関する考察 Consideration about superiority of left-handed pitcher in baseball

1K05A183

指導教員 主査 矢内利政 先生

福地悠太

副査 彼末一之 先生

【目的】

日本プロ野球に所属する選手の投球側と打撃様式の推移（1950年から2007年まで）を調査した研究によると、左投手の割合は約20%を占めることが報告されており（中山2006）、日本プロ野球において左投手は4人に1人しかいないことが示されている。一方、左投手は優れた左打者を抑える際にワンポイントとして起用されることがあるなど、一般的に右投手よりも有利な点が多いと考えられている。しかしながら、現在において左投手の割合は右投手と比べて非常に少ないため、左投手の重要性は右投手よりも高いと推察される。左投手が右投手よりも有利な点として左打者の抑えやすさが挙げられる。その理由は、左利きは選手数が少なく、多くの打者は左投手との対戦経験が少ないことや、左投手のボールリリースの出所が見にくいことが考えられる。また、1塁走者への牽制のしやすさが失点の減少に繋がることなども有利な点であると考えられる。しかし、これらの理論は統計的なデータに裏付けされたものではなく経験者がもつ一般論であるため、その真偽は定かではない。そこで本研究は、一般的に考えられている左投手の利点に着目し、『左投手は右投手よりも優れている』という仮説を立て、日本プロ野球機構（以下、NPB）の公式戦投手成績を集計・分析することにより、仮説の真偽を検証することを目的とした。

【方法】

2009～2011年各シーズンのNPB公式戦において合計投球回数が100イニング以上の投手を対象に分析を行った。対象となる全投手の各シーズンにおいて、左投手が占める割合、左投手と右投手の防御率、奪三振率、被本塁打率、被安打率の平均値を算出し、それぞれの値を左右で比較した。

次に2005～2009年全シーズンを通しての投手と打者の左右の組み合わせにおける被安打率を比較した。また、2009～2011年各シーズンにおけるNPBの全投手の左投手の割合と全打者の左打者の割合を算出し、上記の投打左右組み合わせによる被安打率の結果と併せて左投手が活躍しやすい環境要因が存在するのかが検証した。

【結果】

投球回数が100イニング以上の投手は、2009年は56名（右：35名、左21名）、2010年は56名（右：35名、左：21名）、2011年は50名（右：36名、左：14名）であり、左投手の割合はそれぞれ37.5、37.5、28.0%であった。各シーズンのNPB公式戦に登板した全投手の左投手の割合は、2009年は31.8%、2010年は31.9%、2011年は33.1%となっており、2009年と2010年については分析対象の左投手の割合が全体に占める割合を上回り、

2011年では下回った。また、各シーズンの防御率（右：3.29 -0.02、左：3.34 +0.03）、奪三振率（右：6.75 -0.04、左：6.87 +0.08）、被本塁打率（右：0.72 -0.02、左：0.78 +0.04）、被安打率（右：.230 +0.00、左：.229 -0.01）の平均値を左右投手で比較した結果、それぞれの値に大きな差は見られなかった。2005～2009年シーズンの左右の投打組み合わせによる被安打率は、右投手 vs 右打者が.258、右投手 vs 左打者が.271、左投手 vs 左打者が.262、左投手 vs 右打者が.266であった（表1）。投手と打者の左利き割合は、2009～2011年シーズンにおいて、投手はそれぞれ31.8、31.9、33.1%であり、打者はそれぞれ37.8、36.8、39.9%となっており、打者の方が投手より左の割合が高かった。

【考察】

投球回数が100イニング以上における左右投手の各平均値に大きな差は見られなかったことから本研究の仮説は棄却された。また、左投手の割合も2009年と2010年は分析対象がNPB全体の左投手の割合を上回ったが、その差は約5%であり、2011年では約10%下回っていることから、投球回数が多い投手を優秀な投手と仮定してデータを抽出した場合、左投手の割合がNPB全体の左投手の割合を上回ることを断定するには至らなかった。

投手と打者の左右の組み合わせによる被安打率をみると左投手は左打者に強く、右投手は右打者に強いという結果が得られた。また、対右打者では右投手の方が被安打率は低く、対左打者では左投手の方が被安打率は低くなった。このことから、左投手は対左打者という点において右投手よりも有利であると考えられる。ただし、対右打者においては右投手が有利であることから、左投手が右投手よりも全てにおいて有利であるとは結論づけられないことが示された。

左投手が対左打者において右投手よりも被安打率が低かったことと、投手よりも打者の方が左の割合が多かったことを併せて考察すると、左投手が活躍しやすい環境要因が存在する可能性があることが示された。

表1 2005～2009シーズン左右投打組み合わせごと被安打率

	左投手	右投手
左打者	0.262	0.271
右打者	0.266	0.258